

令和7年度

全国各地の魅力的な 文化財活用推進事業

文化資源活用事業費補助金

応募要領

受付期間

受付開始 令和7年3月3日(月)

受付締切 令和7年4月11日(金) 17:00《締切厳守》

- 応募書類は、文化庁HPの「全国各地の魅力的な文化財活用推進事業」ページよりダウンロードください。
- 提出は、締切までに必要な書類をすべて揃え、メールにて下記事務局まで提出してください。
- やむを得ない理由によりメールでの提出が困難な場合には、事前に事務局までご相談ください。

お問合せ先

- 「全国各地の魅力的な文化財活用推進事業」事務局
TEL:03-3553-2222 (10時00分~18時00分、土・日・祝を除く。)

文化庁 担当課

- 文化庁 文化資源活用課 事業係・活用推進係
TEL:075-451-4111(代表) 内線:9663・9662

応募書類 の提出先

- 「全国各地の魅力的な文化財活用推進事業」事務局
info2025@bunkazai-katsuyo.jp

POINT①

国指定等文化財を活用する
事業が対象
※世界文化遺産、日本遺産を含む

POINT②

補助金上限設定なし
※補助率は1/2~2/3

POINT③

専任コーチが
事業推進をサポート

令和7年3月



Agency for Cultural Affairs, Government of Japan

目次

I 事業概要

1	全国各地の魅力的な文化財活用推進事業とは	2
2	伴走支援について	3
	コーチの紹介	4
3	想定される事業例	6
4	補助の対象となるには	7
5	補助金交付の対象となる事業期間	7
	国指定等文化財(世界文化遺産、日本遺産含む)とは	8
6	補助率および補助金の支払い時期・方法について	9
7	補助事業の対象範囲	10
8	各費目における単価上限、補助対象範囲等	12
9	その他の補助対象外経費等	13
10	評価指標(効果測定)の設定	14

II 応募概要

1	応募に必要な書類	15
2	応募書類の提出期限	15
3	応募書類の提出先と提出方法	16
4	応募書類の作成に当たっての留意事項	16
5	事業計画書の作成にあたっての注意点	17
6	審査及び審査結果の通知について	17
7	評価の主要な視点	17

III 採択決定後の事業の進め方

1	交付申請書の提出	18
2	補助事業者へのお願い	18
3	交付決定後の支援体制	18
4	実績報告書の提出と補助金の支払い	18
5	成果報告書の提出	18
6	各種書類の提出時期・方法	19
7	交付決定の取り消し	19
8	採択後のスケジュール(イメージ)	20
9	事業全体(5年間の)スケジュールと成果の報告	21

IV 関係法令等 22

I

事業概要

全国各地の魅力的な文化財活用推進事業とは

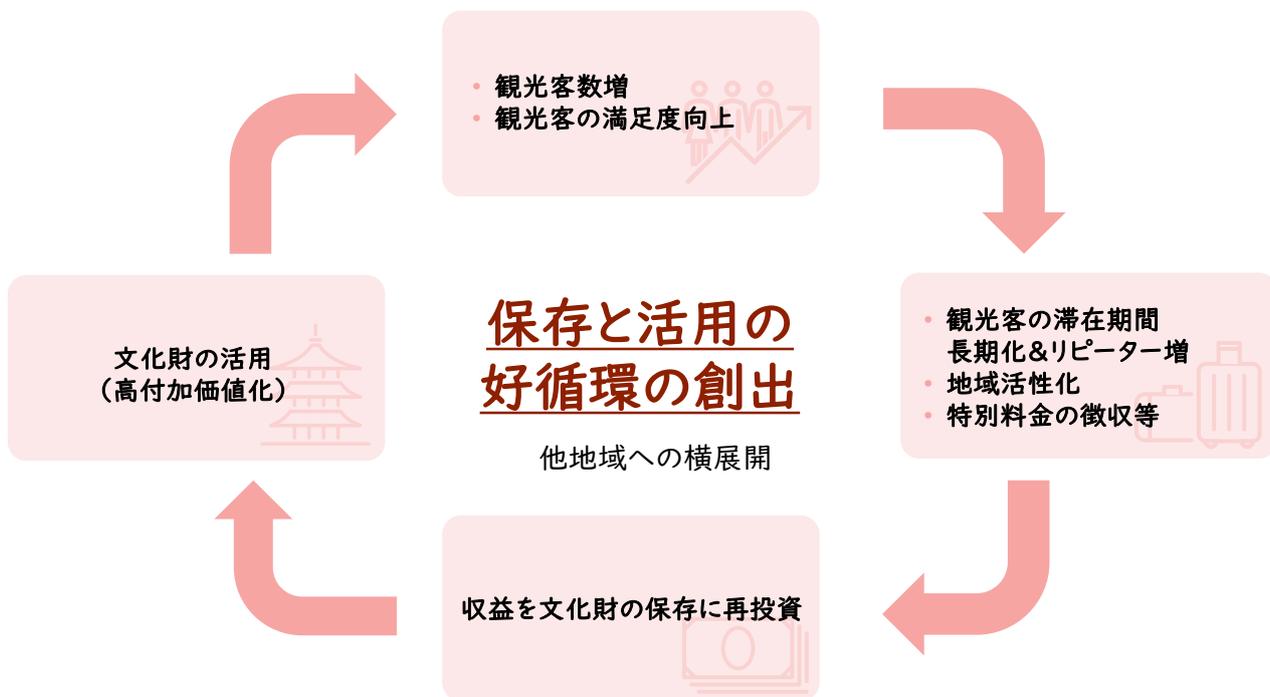
本事業は、我が国が誇る国指定等文化財（世界文化遺産、日本遺産を含む。）を活用した魅力的な体験等の造成・販売等を支援し、当該文化財の高付加価値化を図る事業です。

具体的には、インバウンドの高付加価値旅行者をはじめとする国内外の知的好奇心旺盛な旅行者が、その文化財の成り立ち（なぜその場所でその文化や自然が生まれたのか等）やそれを守ってきた人々の取組等を理解しながら、より深く楽しむことができるような体験等の造成・販売等を支援します。これにより、当該文化財を高付加価値化し、文化財の保存と活用の好循環を図ることを目的としています。

また、本事業では、事業の成功・継続のために、専門家による事業内容、事業実施体制等へのコーチング（改善指導）を取り入れ、専門家との伴走により事業を進めていただきます。交付申請書の提出にあたり、実際の事業の内容を応募時点から変更いただくことがあり、応募内容のとおり事業を行っていただくとは限りません。

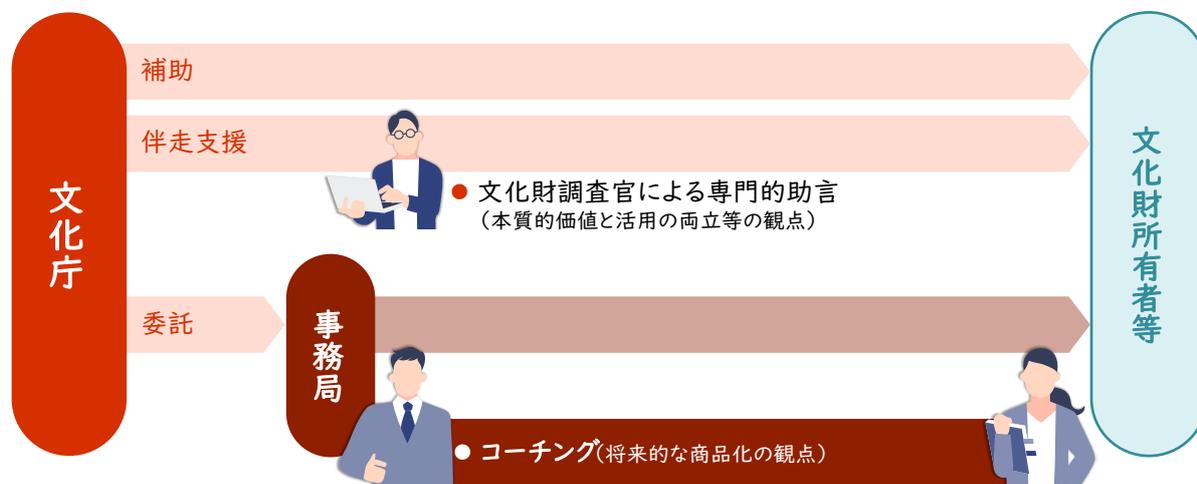
事業によって得られた知見等については、他地域へ広く横展開を行い、全国各地において魅力的な文化財の活用を推進していきます。

目指す姿



2 伴走支援について

事業の成功・継続のために、本事業では民間の専門人材（コーチ）や文化庁の文化財調査官によるサポート体制を整え、事業者への伴走支援を行います。



伴走支援のポイント

■民間の専門人材（コーチ）

事業や事業者が抱える課題に合わせて、以下の観点等から必要な助言を実施



事業の中長期計画の策定

売上増加や支出改善に向け、中長期視点の事業計画の策定をサポート



コンテンツ内容の磨き上げ

ターゲットに合わせて文化財の魅力を最大限に引き出すコンテンツ造成（演出、運営、ガイド、クリエイティブ等）をサポート



プライシング

費用の積み上げではなく、市場のベンチマークや事業計画に基づく、適切な価格設定をサポート



実施体制の補強

地域での自走を前提とした運営ノウハウを確立するための体制づくりをサポート



コンテンツの発信・販売

デジタル化など情報発信の見直しと、ターゲットに合わせた販売チャネルの選定等をサポート



資金調達

地域事情に合わせてクラウドファンディング、ふるさと納税、グッズ販売等による資金調達をサポート

■文化庁の文化財調査官

文化財の本質的価値と活用の両立等の観点から必要な助言を実施

コーチの紹介 ※令和6年度事業における一部のコーチを掲載しており、変更が生じる場合がございます。

■無形文化財・祭り活用



山本 陽平 氏

株式会社あっぱれ 代表取締役

2009年NTT東日本で省庁等との渉外業務、海外事業立上げや経営管理の業務に従事。2017年祭り主催者をサポートする株式会社オマツリジャパンを共同代表取締役として共同創業。7年間で500件以上各地の祭りを支援し、過去の文化庁事業でも複数地域で伴走コーチを担当。2024年に有形/無形の文化全般の観光活用プロデュース及びコンサルティングを行う株式会社あっぱれを設立し、代表取締役に就任。2024年は26地域51件の文化財の支援を行う。

■歴史的建造物活用・観光まちづくり



池上 順一 氏

バリューマネジメント株式会社 地域創生部 兼
コンサルティング事業部 ゼネラルマネージャー

歴史的建造物を活用した施設の運営責任者やホテル等の事業再生に携わる。宿泊事業責任者や、全国各地にて分散型ホテル事業の地域連携による事業開発、推進業務を数多く行う。そのなかで日本初の木造天守での城泊事業など地域の文化財の魅力を活かしたコンテンツ開発も推進。現在は、全国の地域で観光まちづくり事業開発支援にて、地域での事業立ち上げ、ユニークベニューの開発などの観光まちづくり事業全般に従事している。

■地域活性化プロデュース



島田 昭彦 氏

株式会社クリップ代表取締役

京都芸術大学特別講師、京都観光おもてなし大使。京都で代々続く紋章工芸一家に生まれる。雑誌「Number」編集を経て、2005年にクリップを設立し、ヒト・モノ・コト・アート・文化とのコラボレーションによるブランディングやマッチング、新事業・新業態の企画・開発に従事。文化観光まちづくり、地域活性化プロデューサーとして、佐賀県嬉野ティーツーリズム「嬉野茶時」サントリー「伊右衛門サロン」「京都市動物園」「エースホテル京都」等を手掛ける。

■アートプロデュース・イベントプロデュース



辰巳 清 氏

大阪成蹊大学 芸術学部
准教授

株式会社アミューズで、コンサート、演劇・ミュージカル、美術展など、5,000以上の公演を演出・プロデュース。国内外で大型プロジェクトを手掛けた経験を多数持つ。京都府など、芸術文化による地域活性化の社会活動にも携わる。2022年4月に大阪成蹊大学芸術学部准教授に着任。専門分野：アートプロデュース（芸術実践論）、アートマネジメント（芸術経営学）。受賞学術賞：2022年スウェーデン美術館協会：エキシビジョン・オブ・ザ・イヤー2021、「BORO - The Art of Necessity」、展覧会監修。

■トラベルデザイン・ラグジュアリーツアー



永原 聡子 氏

Deneb株式会社 代表取締役／
アトリエラパス株式会社 代表取締役

慶応義塾大学法務博士、米国コーネル大学ホテル経営学修士号、ナンヤン工科大学経営学修士号。外資系金融機関を経て、高級ホテルの企画・開発、サステナブル・ツーリズムのコンサルティング会社ラパスグループ日本法人アトリエラパス設立後、海外富裕層向け旅行デザイン会社DENEBC創業。自然・文化遺産に新たな角度から光を当て、唯一無二のストーリーのある旅を提供。観光庁委員や環境省の国立公園活用など、政府系審議会の委員を多数務める。

■和コンテンツ・空間・照明プロデュース



村山 和正 氏

株式会社 京都村正

北海道・東京にてクラブのレギュラーDJとして活動。お台場のFM局でディレクターとして番組制作に携わった後、大手イベント制作会社で企画・制作・運営に従事。30代から「ものづくり」の世界に入り、ディスプレイや什器・印刷物の制作技術を学ぶ。現在は京都・東京で製菓会社や自動車関連企業のプロモーション、ラグジュアリーブランドのイベント企画のほか、世界遺産比叡山延暦寺や国立博物館といった文化施設のPRや事業企画を担う。

コーチの紹介 ※令和6年度事業における一部のコーチを掲載しており、変更が生じる場合がございます。

■ガイド育成・インバウンド・地域創生



佐々木 文人 氏

株式会社羅針盤 代表取締役

東京大学経済学部卒業。損保ジャパンを経て、ポストン・コンサルティング・グループへ。在職中、新規事業開発・営業改革のプロジェクトに従事。企業の売上拡大・業務効率化に貢献。結婚後退職し、1年間の世界一周新婚旅行を経て2014年に株式会社ノットワールドを創業。2015年より、東京で外国人向けのツアーを企画・催行開始。4年連続でTripadvisorのエクセレンス認証を獲得。2023年合併に伴い株式会社羅針盤代表取締役に就任。

■富裕層観光



牧野 雄作 氏

J-CAT株式会社(Otonami/Wabunka)
CSO(最高営業責任者)

「一休.com」を運営する(株)一休のベンチャー期に参画。一流旅館の予約事業責任者や日本初の高級別荘予約サイト『一休.comバケーションレンタル』の立ち上げを行う。訪日・海外旅行予約のVoyagin(現:楽天グループ)にてゼネラルマネージャーとして勤務。主にインバウンド向けの従事。その後は富裕層向けの不動産開発を行うNOT A HOTEL(株)に勤務。2022年よりJ-CATに参画し、官民連携事業等に携わる。

■イベントディレクション・プロデュース



霜津 孝社 氏

株式会社 エージェントゼロ 代表取締役

広島を拠点にエリアやジャンルを問わず様々なイベントから伝統芸能ひろしま神楽まで幅広くプロデュース。中国地方最大級の野外音楽フェスイベントの制作にも継続的に携わる。広島電鉄 地域交流事業KOI PLACEのプロデュース、地域のプレイヤーとの連携や地の伝統を活かして街の未来を考える「コイミライブプロジェクト」の統括ディレクション等も担当。近年は京都の嵐山におけるエリア活性化事業の企画立案・ディレクションなども手掛ける。

3 想定される事業例

インバウンドの高付加価値旅行者をはじめとする国内外の知的好奇心旺盛な旅行者が、その文化財の成り立ち（なぜその場所でその文化や自然が生まれたのか等）やそれを守ってきた人々の取組等を理解しながら、より深く楽しむことができるような体験等を造成し、**翌年度以降も継続的に販売を行うことで、収益を文化財の保存に再投資することを旨とする事業**が対象となります。

【支援対象外】

・一過性のイベント実施や、モニターツアーのみの実施、単なる広報素材のみの作成、インバウンドの来訪が見込まれないなど、事業効果が低いと考えられるものや、応募事業者において従前から実施されているコンテンツと比較して新規性の乏しいもの。

富山県 高岡市

三大寺を軸に高岡の風土や伝統技術を伝える

事業者：（一社）富山県西部観光公社 水と匠
核となる文化財：国指定／瑞龍寺、勝興寺、国泰寺、高岡銅器、高岡漆器

日本一の銅器の産地である富山県高岡市。瑞龍寺・勝興寺・国泰寺といった寺院の存在が高岡銅器や高岡漆器などの伝統工芸を育ててきた歴史背景を踏まえ、この三寺院と伝統工芸を結んだ新たなツアーを造成・販売。コンテンツとしては、各寺院における座禅や精進料理体験に加え、各寺院で使われている仏具を制作する職人から歴史や風土を直接学びながら高岡銅器の制作体験を楽しむ機会を設けた。また、体験だけではなく、**そこでしか買えない高価なお土産の開発により収益増を図り、マネタイズ視点でも地元還元する仕組み**を作った。



愛知県 名古屋市

ナイトミュージアムで新たな来場機会を創出

事業者：徳川美術館
核となる文化財：国指定／徳川美術館、徳川美術館の美術工芸品

以前にも実施していたナイトミュージアムをさらに充実させた「トクガワナイトミュージアムPREMIUM」を企画。**夜間のアイドルタイムを活用**し、目玉である源氏物語絵巻やさまざまな美術品、鷹狩の絵巻など、貴重な展示品を一つひとつ丁寧に**学芸員の解説付きでめぐる特別なプレミアム館内ツアー**や、往時の装束をまとったゲストと学芸員によるトークショーを設けた。そこでは、「源氏夜会」をイメージしたフードの提供や、ライトアップなどによりエンターテインメント性を高めることで、幅広い客層に楽しんでもらえるナイトコンテンツを造成した。



佐賀県 嬉野市

ティーツーリズムの高付加価値化と担い手育成

事業者：嬉野茶時
核となる文化財：日本遺産／肥前吉田焼、食文化（お茶）

元々、茶畑に設けた天茶台で茶農家が自ら育てたお茶を入れて客人をもてなす体験を提供していたが、茶空間体験のベストシーズン（4～6月）が茶摘みの繁忙期と重なるため、体験を提供できず機会損失を生んでいた。そこで、**コーチのアドバイスにより、SNS等を通じてサポートメンバーを募集し、2か月の研修プログラムを実施。「Tea Tourismコンシェルジュ」として導入することで通年での体験提供を実現**した。また、**嬉野の日本酒をペアリングした料理を、地域の伝統工芸品である肥前吉田焼の食器で提供することにより、お茶体験の高付加価値化を実現**。



島根県 浜田市

伝統ものづくり工房探訪による石見神楽の深い理解

事業者：（一社）浜田市観光協会
核となる文化財：日本遺産／石見神楽

ユネスコ無形文化遺産に登録されている石州和紙の工房で職人解説付きの制作体験や神楽衣装の制作工房での着付け、神楽面工房で職人の手ほどきを受けてオリジナル面の給付け体験ができる**石見神楽を支える産業ツアーを実施**。石見神楽の理解を深まった後に歴史ある神社で演者の神楽解説や、演目にちなんだオリジナル弁当での飲食と共に鑑賞。観賞後は演者と記念撮影したり交流できる、**神社でのプライベート特別公演を実施**した。



4 補助の対象となるには

補助の対象となる者（補助事業者）となるには、下記(1)・(2)の全ての条件が整っている必要があります。

(1) 補助の対象となる者（補助事業者）

補助事業者は、所有者、管理団体、地方公共団体、民間事業者またはこれらで構成される協議会等とします。

※補助事業者は補助対象事業を実施するために必要な運営上の基盤を有する必要があることから、協議会等である場合にも、次の4つの要件を満たすことを条件とします。

- ・定款に類する規約を有すること
- ・団体の意志を決定し、執行する組織が確立していること
- ・自ら経理し、監査する会計組織を有すること
- ・活動の本拠となる事務所等を有すること

※補助事業者が対象文化財の所有者又は管理団体でない場合、所有者の同意を得るとともに、各自治体の文化財担当者や学芸員等へも必ず事前に説明を行ったうえで申請すること。

(事業開始後、文化財所有者・管理団体へ事前に十分な事業説明がなされていない等、事業実施に必要な同意を得ていないことが発覚した場合、交付決定を取り消す場合がございます。)

(2) 補助の対象となる事業

補助対象となる事業は、次の1~4全てを満たすこととします。

1. 国指定等文化財（世界文化遺産、日本遺産を含む）を核として当該文化財を高付加価値化し、活用から保存への再投資を図ることによって持続可能な保存・活用の好循環を創出する事業であること。

※国指定等文化財（世界文化遺産、日本遺産を含む）についての詳細は、次頁をご参照ください。

2. 対象文化財が、以下の(1)もしくは(2)の市区町村に該当すること

(1) 次の①から③までに該当するものとして、観光振興事業費補助金交付要領別表（応募様式A【観光振興事業市区町村】シートに記載）で定める市区町村

- ① 訪日外国人旅行者の来訪が多い市区町村
- ② 世界遺産、日本遺産、国営公園、国立公園満喫プロジェクトを実施している国立公園又は重要伝統的建造物群保存地区等が所在する市区町村
- ③ 国際的なイベント等の開催を予定している市区町村

(2) 訪日外国人旅行者の来訪が増加することが見込まれ、受入環境整備の必要性が特に認められる市区町村

3. 外国人観光客の入れ込み数の目標値及び計測方法を設定していること。

ただし、有識者により外国人観光客の入り込み数の目標値及び計測方法の妥当性を検証し、適当でないものについては、目標値修正等のうえ条件付き採択を行うこととする。

4. 対象文化財又はその周辺において、Wi-Fi、多言語、キャッシュレス対応や洋式トイレ等の受け入れ環境の整備が出来ている又は事業年度中に整備する計画があること。

(文化財の特性上整備できない等上記を満たせない場合は、事務局までお問い合わせください。)

5 補助金交付の対象となる事業期間

- ・採択の通知日から令和8年2月28日までの間（予定）
- ・この期間内に、コンテンツ造成等を実施してください。そのうえで、令和8年3月10日まで（必着）に実績報告書を含む、すべての精算書類（関係各所への支払証憑を含む）の提出を済ませるようお願いいたします。
- ・期間内に事業を完了できなかった場合または期間内に提出書類の提出ができなかった場合は、対象経費のお支払いができません。

国指定等文化財（世界文化遺産、日本遺産含む）とは

■本事業の対象となる国指定等文化財については、以下をご参照ください。

世界遺産
日本遺産
国宝（建造物）
国宝（美術工芸品）
重要文化財（建造物）
重要文化財（美術工芸品）
重要無形文化財
重要有形民俗文化財
重要無形民俗文化財
特別史跡
国指定史跡
特別名勝
国指定名勝
特別天然記念物
国指定天然記念物
重要文化的景観
重要伝統的建造物群保存地区
国登録有形文化財（建造物）
国登録有形文化財（美術工芸品）
国登録有形民俗文化財
国登録無形民俗文化財
国登録記念物
記録作成等の措置を講ずべき無形の民族文化財
記録作成等の措置を講ずべき無形文化財



国宝（建造物）



重要文化財（建造物）



重要無形民俗文化財



特別史跡



無形民俗文化財



重要伝統的建造物群
保存地区

※“核となる文化財”を中心に、ストーリー的に関連する複数個所で実施することも可能です。
(例：日本遺産の構成文化財)

■他、文化財について参考となるプラットフォームを下記にて展開しておりますので、併せてご参照ください。

【参考】

(文化財の体系図 | 文化庁)

https://www.bunka.go.jp/seisaku/bunkazai/shokai/gaiyo/taikeizu_1.html

(文化遺産オンライン)

<https://bunka.nii.ac.jp/>

6 補助率および補助金の支払い時期・方法について

補助金の額に上限はありませんが、補助対象経費の1/2を限度とします。

ただし、持続的な実施によって観光客の増加および満足度の向上に高く寄与すると認められ、補助事業者の財政状況、事業の集中投下及び事業の遂行による収入額等を総合的に勘案して特に必要と認められる場合には、補助対象経費の2/3を交付の上限として、予算の範囲内で補助金の額を調整します。

※補助金の額に上限・下限はありませんが、コンテンツを造成することを踏まえ、500万（税抜）～5,000万（税抜）程度を想定目安としています。（目安を大きく外れる補助希望額の場合、他の事業よりも詳細にヒアリングする可能性があります。）

特に必要と認められる場合

項目	必要な要件	補助率の加算
1 自治体による文化財等に関する地域計画の策定	文化財保存活用大綱、文化財保存活用地域計画、歴史文化基本構想又は歴史的風致維持向上計画を策定している地方公共団体の域内において実施される事業である場合	+5%
2 補助事業者の財政規模について、右記の指数が一定の割合である場合	(ア) 地方公共団体の場合=財政力指数が0.5以下 ※ 財政力指数=地方交付税法(昭和25年法律第211号)第14条及び第21条の規定により算定した基準財政収入額を同法第11条及び第21条の規定により算定した基準財政需要額で除して得た数値の過去3年間の平均値	+10%
	(イ) (ア) 以外の場合=事業規模指数が0.1以上 ※ 事業規模指数=補助対象となる総事業費/補助事業者の財政規模 ※ 当該補助事業者の財政規模 1) 団体の場合=当該事業を実施する日の属する会計年度の前々年度以前3会計年度の平均収入額(実績がない場合は当該年度の収入見込額) 2) 個人の場合=前年分の収入額	+10%
3 登録DMOとの連携	協議会等に、観光庁に登録された登録観光地域づくり法人(登録DMO)が参加している場合	+5%
4 他事業との連携	当該年度に、他の国際観光旅客税を充当する事業(※)と連携して実施することを計画している事業である場合 ※「高付加価値化された文化財への改修・整備促進事業」「文化財多言語解説整備事業」等	+5%
5 文化観光推進法に基づき認定した拠点計画及び地域計画との連携	文化観光拠点施設を中核とした地域における文化観光の推進に関する法律の認定を受けた拠点計画又は地域計画に基づく事業又は当該事業と連携して実施することを計画している事業である場合 ※ なお、本項目を適用する場合は項目3を適用しない。	+5%

補助金の支払時期は、原則、補助事業完了後、実績報告書をもとに事務局及び文化庁において内容を審査し、補助金の額を確定した後、文化庁から直接支払います。

7 補助事業の対象範囲

本事業のコンテンツ造成等に関わる費用が支援の対象になります。

補助対象となる範囲

区分		内容	
1	調査	<ul style="list-style-type: none"> ● マーケット調査 <ul style="list-style-type: none"> ターゲットについての調査 観光戦略の策定 類例調査 等 	<ul style="list-style-type: none"> ● 時代考証の観点 <ul style="list-style-type: none"> 歴史資料等の調査 事例調査 時代考証の専門家招聘 等
2	コンテンツ造成	<ul style="list-style-type: none"> ● 事業開発 <ul style="list-style-type: none"> 協議会等の開催 運営プランの検討 収益性、PR計画等の検討 販売の専門家招聘 運営マニュアルの作成 等 	<ul style="list-style-type: none"> ● コンテンツの企画・造成 <ul style="list-style-type: none"> 協議会等の開催 コンテンツの企画・造成 実施、演出プランの策定 コンテンツの商品化検討 等
3	備品の制作・購入、設備の導入	<ul style="list-style-type: none"> コンテンツの実施に必要な衣装、調度品、備品の制作・購入 コンテンツの実施に必要なAR等のコンテンツ制作・機材購入 コンテンツの実施に必要な設備の導入 解説ツールの制作・多言語対応 等 	
4	実施のための準備	<ul style="list-style-type: none"> コンテンツの実施に関する実証 モニターツアーの実施 等 	
5	コンテンツの販売、実施	<ul style="list-style-type: none"> コンテンツの実施・検証 対外的な情報発信に必要な素材等の作成 宣伝プロモーション活動 等 	

<参考> 2年間でコンテンツを造成する場合

補助事業期間は1年としますが、1年で販売まで至らない場合などに、2年間でコンテンツを造成、販売実施を行っていただくことも可能です。

ただし、補助事業の採択は年度ごとに審査の上、行いますので、初年度の事業が採択されたとしても次年度以降の採択・補助金の交付を保証するものではありません。

1年目	2年目
<div style="border: 1px solid #ccc; border-radius: 15px; padding: 5px; background-color: #e0e0e0; text-align: center; margin-bottom: 10px;"> 事業実施期間 (採択通知日～令和8年2月28日) </div> コンテンツ造成 調査／造成／備品制作／実施準備 (広報、プロモーション) ※本応募で補助金の申請をいただけるのは1年目 (本年度) に発生する補助対象経費のみです。	<div style="text-align: center; margin-top: 100px;"> </div> <div style="text-align: center; margin-top: 10px;"> </div> コンテンツ販売・実施・検証

なお、事業期間内に、本事業の対象となったコンテンツの造成・販売等に要した総費用（本事業の対象として申請しなかった経費や上限を超えた費目、本事業の対象外経費等を含む。）に対して、本事業の対象となったコンテンツ等が直接的に生み出した売上（当該コンテンツ等に付随する売上は含まない。他の取組と併せて実施した場合は、本事業の対象となったコンテンツの寄与分に限る。）が上回った場合、上回った利益分について、事業者と調整後に精算額から減額します。

補助対象外の例

- ▽ 従前から開催されているものと同内容のイベントの開催にかかる経費
- ▽ インバウンドを対象としない事業にかかる経費
- ▽ 事業の趣旨・目的に沿わない経費・積算根拠が不明瞭な経費
- ▽ 補助事業者及び協議会等の構成団体又はその構成員等に対する支出 等
- ▽ 令和8年2月28日までに完了できない施策にかかる経費
- ▽ 建物の修繕・改修にかかる経費

8 各費目における単価上限、補助対象範囲等

※ 赤字は特に注意すべき点
 ※ 単価は見直される場合があります。

費目／細分		注意事項	上限金額(税込)
賃金	非常勤事務員賃金	本事業のために臨時に雇用する場合のみ対象	1,300円/時間
	資料整理賃金		
	作業員賃金		
	会場整理等賃金		
共済費	傷害保険料	ボランティア保険など	-
	社会保険料	本事業のために雇用された賃金職員の事業主負担分のみ	-
報償費	会議出席謝金	有識者による審議、討論等	14,000円/日
	講師等謝金	講演会・講習会において専門的なテーマで講演するもの	11,510円/時間
	指導謝金	技術等の実演、指導等	5,200円/時間
	原稿執筆謝金	日本語(1枚※400字)	2,040円/枚
		外国語(1枚※200ワード)	5,100円/枚
	翻訳謝金	和文英訳(1枚※200ワード)	6,290円/枚
		英文和訳(1枚※400字)	4,400円/枚
		その他和訳(1枚※400字)	4,990円/枚
通訳謝金	英語	11,690円/時間	
	英語以外の外国語	11,810円/時間	
※ 上記によらない場合の謝金単価については、団体の内部規定によるなど、算出根拠となる書類を提出してください。			
旅費	交通費	公共交通機関を利用して最も経済的・効率的な区間の実費相当額	-
		実行委員会内の事務会合に係る交通費 特別料金(グリーン料金、ビジネスクラス料金等)、タクシー代、レンタカー代、ガソリン代	全額補助対象外
	宿泊費	真に必要な場合のみ(食事代(パック料金の場合は相当額)は補助対象外)	9,800円/泊
使用料及び借料		事業等を行うために必要な機械器具、会場、物品等のリース・レンタルに要する経費	
役務費	通信運搬費	事業遂行に必要な各通知等発送、報告書・パンフレットの宅配等の経費	
	広告宣伝費	事業内で行う、広報等に必要となる費用(例:ウェブサイト・パンフレット等の制作費、SNS運営費、メディア等へのリリースに要する費用)。	
	〇〇保険料	輸送保険料、火災保険料、イベント保険等	
	振込手数料等	本事業で必要となる金融機関への振込手数料等	
	写真焼付料	本事業で必要となる画像データからの写真焼付料等	
	手数料	各種検査手数料等	
	雑役務費	事業の目的を達成するために付随して必要となる定型的な外注業務費(印刷等の軽微な請負業務等)	
委託費	コンテンツ制作委託費	その専門性などから補助事業者が直接できない内容に限り委託費、請負費としての計上が可能。 作業一式を外委託等する場合は、委託等内容及び経費積算の分かる資料を添付すること。尚、外部に委託する場合でも各費目において本表の基準を適用すること。(見積書にも内訳を記載すること)	-
	〇〇委託費		
請負費	請負費		
備品購入費	備品購入費	本事業の取組に必要な機械・備品の購入費及び修繕費等(ただし、税抜50万円以上の財産を取得した場合、財産取得管理台帳への記載が必要となります)	
原材料費	〇〇費	機械器具、展示品、展示造作物等の材料費がかかる場合	
需用費	消耗品費	事業等を行うために必要な消耗品(例:紙、封筒、ファイル、文具用品類)の購入に要する経費。ただし、本事業等のみで使用されることが明確に確認できるもの、単価が税込10万円未満のものに限る。	
	印刷製本費	パンフレット印刷費等	
	通信費	本事業で必要となる通信費(P13記載の補助事業者の維持管理経費は補助対象外)	
	郵送料	本事業で必要となる郵便料金等	
	会議費	会場の使用料、資料の準備にかかる費用等(飲食費・懇親会費は補助対象外)	
設備導入費	設備導入費	設備購入費、工事費、取り付け費等(ただし、税抜50万円以上の財産を取得した場合、財産取得管理台帳への記載が必要となります)	

全費目で共通する証憑書類

- ・1者当たり発注予定金額が50万円(税込み)以上の場合、見積書を添付すること。
- ・1者当たり発注予定金額が100万円(税込み)以上の場合、複数者からの見積書を添付すること。
契約の際は可能な限り入札により相手方を決定すること。
- ・複数者からの見積書を添付することができない場合は、その理由を添付すること(様式任意)。

9 その他の補助対象外経費等

費目	注意事項
旅費/交通費	<p>実行委員会内の事務会合に係る交通費 特別料金(グリーン料金、ビジネスクラス料金等)、タクシー代、レンタカー代、ガソリン代 外国旅費 ※但しモニターツアーにかかるタクシー代、レンタカー代、及びコンテンツ販売促進にかかる外国旅費については一部認められるケースがございますので、別途事務局までお問い合わせください。</p>
旅費/日当	<p>日当及び日当に相当すると認められる定額支給のものすべて</p>
食糧費	<p>食糧費全般(講師用の弁当、会議用の水等もすべて) ※食に関するコンテンツ造成事業の場合は一部認められるケースがございますので、別途事務局までお問い合わせください。</p>
委託費/請負費	<p>その専門性などから補助事業者が直接できない内容に限り委託費、請負費としての計上が可能。事業の主たる部分(企画、実施、とりまとめ等)や事務的に処理しうる内容についてまで委託費、請負費としての計上は不可</p>
不動産関係費	<p>建物の建設・修繕費、不動産購入費、不動産賃貸費、安全柵等の整備費</p>
補助事業者が当然負担すべき経費	<p>補助事業者の維持管理経費(家賃、光熱水費、電話代、臨時雇用者以外の賃金、パソコン・プリンタの借料、コピー機の保守料、サーバー維持管理費等)、クリーニング代、収入印紙代、印鑑類等</p>
応募経費	<p>本事業の応募に係る通信費、旅費等</p>
補助期間外の支出	<p>補助対象期間外(採択通知日から完了日の間以外)に実施した事業に係る経費、後年度分の負担となる経費、本補助事業期間内に使用しないものに係る経費、事業期間内に納品されなかった物品等に係る経費、事業期間内に役務提供が完了していない経費</p>
その他	<p>ポイントによる支払いを行った場合の当該ポイント分の経費、法令や交付要綱等に反した使用に係る経費</p>

※ 経費の性質上、上記と同義のものは同様の取扱となります。

※ 上記に記載の単価は補助金を充当できる上限単価であって、実際の支出単価は、補助事業者において基準を定める等、適切に運用すること。

10 評価指標（効果測定）の設定

補助事業の実施による中長期的な効果进行评估するため、評価指標（測定指標と目標値）を設定します。

補助事業者が設定する評価指標は下の項目から最も近いものを選択した上で、**具体的な測定指標と目標値を設定**してください。なお、現状値は原則として令和6年度（令和6年度の実績値が確定していない場合は令和5年度）とします。

また、**目標値は事業終了から4年後を考慮の上設定**してください。測定指標は状況やねらいに合わせて、補助事業者で適切なものを設定いただきますが、検証可能な具体的な指標を用い、目標値を設定するようにしてください。

なお、対象文化財に来訪した観光客総数と外国人観光客数、本事業として造成したコンテンツへの参加者総数と外国人参加者数については、必須とします。

なお、適切な評価指標および効果測定手法の設定についても、事業採択後のコーチング（改善指導）対象となります。

補助事業者で設定する測定指標の例

- 対象文化財に来訪した観光客総数及び外国人観光客数（必須）
- 本事業で造成したコンテンツへの参加者総数及び外国人参加者数（必須）
- 本事業で造成したコンテンツの想定売上額（必須）
- 本事業で造成したコンテンツの想定利益額（必須）
- 当該地域への観光客数における対象文化財に来訪した観光客数の割合
- 対象文化財における外国人観光客の満足度、再訪意向、紹介意向（アンケート調査）
- 当該地域における観光消費額
（当事業で造成したコンテンツ収入の割合が分かれば、より良い）
- 当該関連事業への協賛金の総額、協賛企業の増加状況 等

II

応募概要

応募に必要な書類

(1) 応募書類一覧

応募書類名	様式
□ 交付要望書	(応募様式A-0)
□ 補助事業者の概要 ※法人格を有しない団体の場合は、次の書類を添付してください。 ・定款、寄附行為又はこれらに類する規約 ・団体の意思決定組織、執行組織、会計組織が確立していることが分かるもの(組織図等。 規約に記載がある場合は、該当部分を分かるようにしたもので構いません。)	(応募様式A-1)
□ 事業計画書(全体)	(応募様式A-2)
□ 事業計画書(コンテンツ別) ※作成する事業内容等を、コンテンツごとに示したもの	(応募様式A-3)
□ 補助事業者の事業規模指数に関する書類	(応募様式A-4)
□ 収支予算書	(応募様式B-1)
□ 支出内訳明細書	(応募様式B-2)
□ 見積書 ※1者当たり発注予定金額が 50万円(税込み)以上 の場合に見積書を徴取して添付。 ※1者当たり発注予定金額が 100万円(税込み)以上 の場合、複数者から徴取した 見積書を添付 。 ※複数者から見積書を徴取できない場合は、理由書(様式任意)を添付。 ※見積書は 写し を添付(原本は、申請者において保管すること)。	(様式任意)
□ 同意書・誓約書 ※誓約書については、補助事業者が地方公共団体の場合のみ、提出不要です。 ※同意書については、補助事業者と文化財所有者又は管理団体が異なる場合に提出ください。	(応募様式C)
□ 事業概要書 ※公開可能な内容で作成願います。	(応募様式D)
(地方公共団体以外であって、事業規模指数に応じた加算を求める場合) □ 応募様式A-4の根拠となる書類 (例:損益計算書、正味財産増減計算書)	(様式任意)

- * 提出書類について、必要に応じて上記以外の書類の提出を求める場合があります。
- * 書類は補助金交付の対象となる者(補助事業者)が作成してください。
関係のない者(委任契約に基づく委任関係にある者を除く。)が作成していることが明らかな場合は不採択となることもあります。
- * 応募様式A-2、A-3に記載のコンテンツ内容や事業推進にあたって参考とする史料(歴史研究や調査の材料となる文献や遺物など)については、任意で資料をご追加ください。

2 応募書類の提出期限

応募書類の提出期限

令和7年4月11日(金) 17:00《必着》

※ 提出期限を過ぎた後の応募書類の差替えや再提出・追加提出は一切認められません。

3 応募書類の提出先と提出方法

(1) 提出先

応募書類に必要事項を記入の上、事務局宛にご提出ください。

応募書類提出先

info2025@bunkazai-katsuyo.jp

(2) 提出方法

文化庁HPから応募書類一式をダウンロードし、上記提出先にメール添付にてご提出ください。

- ・ファイル名には、各様式名の後に補助事業者名（※略称可）を入れてください。
例 応募様式A_〇〇株式会社
- ・Excel形式によるデータ形式の様式については、Excel形式で提出してください。
その他の様式については、PDFファイルで提出してください。
- ・上記のほか、全ての様式及び提出書類を一括したPDF ファイルを提出ください。その際、P15 II (1) 応募書類一覧表の順に並べてください。
- ・添付容量を超えて送信できない場合は、事務局から大容量ファイルの送信方法についてご案内いたしますので、ご連絡ください。

4 応募書類の作成に当たっての留意事項

- ① 応募書類の提出後、厳正なる審査を経て採択が決定した申請者には、採択決定通知を送付いたします。交付申請書は、公募の際に作成した応募書類を元に、文化庁が指摘する項目・コーチング内容を付け加えていただき提出していただきます。応募書類の内容から交付申請書提出までに内容の変更が生じる可能性があることを予めご理解いただきご応募ください。
- ② 補助を受けようとする同一内容の事業について、「国が実施する他の補助事業」、「文化庁が実施する他の補助事業」、「独立行政法人日本芸術文化振興会が実施する助成事業」と重複して補助を受けることはできません。
- ③ 補助対象経費については、事業説明書のP.12「8 各費目における単価上限、補助対象範囲等」を参照してください。
- ④ 応募書類の内容等について文化庁から問い合わせることがありますので、応募書類の作成者は写しを一式保管するようにしてください。なお、応募書類は返却しませんので、あらかじめご了承ください。
- ⑤ 提出書類に記載する文言や、掲載する画像は公表可能なものを使用してください。事前連絡のうえ、事例紹介等で活用させていただく場合があります。
- ⑥ なお、提供する画像は1MB程度（1600ピクセル×1200ピクセル程度）、一目見て被写体が何かわかりやすいものを推奨します。

5 事業計画書の作成にあたっての注意点

補助事業者は、申請に当たり実施する補助事業の事業計画書（応募様式A-2、A-3）を作成します。

本事業は、専門家による事業内容、事業実施体制等へのコーチング（改善指導）を取り入れ、専門家との伴走により事業を進めていただく点が特徴であり、事業計画の策定についても伴走支援の対象となるため、事業計画書は現時点で想定している内容を記載してください。

6 審査及び審査結果の通知について

文化庁に提出された応募書類に基づき、内容の確認を経て審査を行った上で採否を決定します。採否結果は、[令和7年6月上旬](#)を目途に文書にてお知らせします。

なお、募集の要件を満たしたとしても、厳正な審査の結果、採択されない場合や減額される場合もあります。

7 評価の主要な視点

		評価の主要な視点
I	コンテンツ造成	<ul style="list-style-type: none"> インバウンドの高付加価値旅行者をはじめとする国内外の知的好奇心旺盛な旅行者が、その文化財の成り立ち（なぜその場所でその文化や自然が生まれたのか等）やそれを守ってきた人々の取組等を理解しながら、より深く楽しむことができるような体験等の造成であること。 <p>※例えば、一般公開だけ行ってきた文化財において、継続して提供できる体験コンテンツの造成等を想定</p>
II	事業効果	<ul style="list-style-type: none"> 増えた収益を文化財の修理に充てるなど、活用から保存へ再投資を行い、好循環を創出する事業内容となっていること 訪日外国人観光客の誘客にも資する事業内容となっていること（ターゲット設定、多言語対応、便益設備、販路開拓等）
III	事業の実施体制	<ul style="list-style-type: none"> 将来の自走化に向けて、申請者において、今年度の実施体制が適切に計画されていること 文化財所有者はもとより、地方公共団体（文化財、まちづくり、観光等の部局）、観光地域づくり法人（DMO）、交通・飲食・宿泊事業者等の関係者との連携を目指していること

Ⅲ

採択決定後の事業の進め方

1 交付申請書の提出

採択が決定した申請者は、採択条件等を踏まえて、「交付申請書」を作成・提出します。交付申請書は、公募の際に作成した応募様式等を元に、文化庁が指摘する項目・コーチング内容を付け加えていただき、提出いただきます。

文化庁にて再度審査の上、内容が適切と認められた場合に補助金の交付決定を行います。詳細は採択が決定した申請者に対して、別途お知らせします。

2 補助事業者へのお願い

(1) 補助事業で作成される資料・媒体（アプリ等）には、原則として文化庁シンボルマーク及び本補助事業名等を掲載していただきます。

(<http://www.bunka.go.jp/bunkacho/symbolmark/index.html>)

(2) 優良事例に関しては、視察等の受け入れをお願いする場合があります。

3 交付決定後の支援体制

当該事業の進行管理は、事務局及び文化庁が行います。

- ・各採択事業の進捗の確認
- ・専門人材によるコーチングによる事業サポート
- ・効果的・効率的な事業の実施に資する情報提供
- ・公式ウェブサイト等への事例の掲載
- ・各種問い合わせ窓口の設置
- ・セミナーの実施 等

4 実績報告書の提出と補助金の支払い

原則、補助事業完了後に提出いただく「実績報告書」をもとに、事務局及び文化庁において内容を審査し、補助金の額を確定した後、4月末までに（補助対象年度翌年）、文化庁から直接支払います。

補助事業の円滑な遂行のため、「概算払」の請求も可能です。但し、収支状況なども鑑み、特に必要と認められる場合のみとなりますので、ご了承ください。

5 成果報告書の提出

事業終了後に、「成果報告書」の提出を求めるものとします。「次年度計画書」と併せて、「成果報告書」等をご提出いただきます。

報告書には、添付書類として、事業の内容を示す証拠書類（写し）を添付し、実施した事業の内容が具体的にわかるよう整理のうえ提出願います。

※ 実績数値が確定し次第、速やかにご提出いただきます。（最終期限：5月）

※ 詳細については、採択団体に対して別途ご連絡します。

※ 事業の実施中において、文化庁より必要書類の提出を求められることがあります。

6 各種書類の提出時期・方法

書類名	内容	提出方法	提出期限	提出先
交付申請書	交付申請書は公募の際に作成した応募様式等を元に、文化庁が指摘する項目を付け加え作成します。 また「事業概要書(申請時から内容を更新したもの)」も併せて提出します。	メール	採択内定通知より約2か月後の指定する日	補助事業者 ↓ 事務局
中間報告書	申請当初の事業計画に基づき進捗しているか、また、造成するコンテンツを持続的に運営していくために必要な項目の達成状況の確認のために提出します。 内容に応じて事務局からヒアリングや改善要請を致します。	メール	交付決定後、10月の予定	補助事業者 ↓ 事務局
実績報告書	補助金の支払いの根拠となる書類。 補助金対象年度の実績と費用明細を記入し、必要書類と共に提出します。	メール	事業完了後30日以内、または令和8年3月10日(必着)	補助事業者 ↓ 事務局
成果報告書	実施した事業の内容や効果がわかるよう整理の上、事業内容を示す証拠書類を添付し、最終的な報告書として提出します。	メール (* 添付書類については郵送も可)	指標となる数値(入場者数等)が確定次第速やかに提出。 ※ 令和8年5月が期限。	補助事業者 ↓ 事務局
次年度計画書	当年度の成果を踏まえ、次年度におけるコンテンツの展開について計画書を作成します。			
コンテンツタリフ又は使用書	造成したコンテンツを広報するための素材、及び導入した設備の使用・活用方法、販売に関する情報をコンテンツ毎に作成します。			

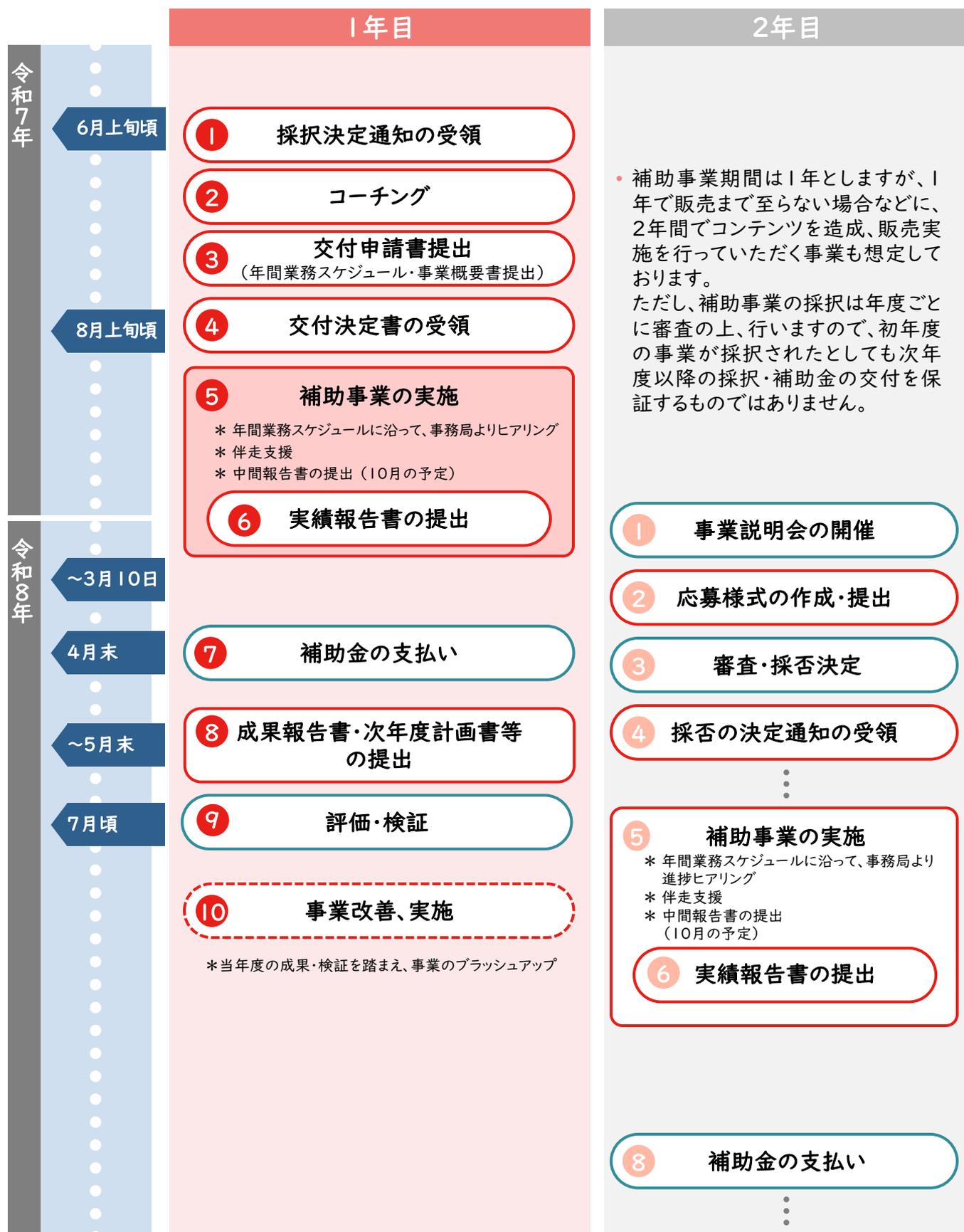
7 交付決定の取り消し

本補助金は、「補助金等に係る予算の執行の適正化に関する法律」(昭和30年8月27日法律第179号)及び「同法施行令」(昭和30年9月26日政令第255号)の適用を受けます。本事業に応募される申請者においては、下記にご留意ください。

- 補助事業の実施内容が実施計画や交付決定の条件と著しく異なっていると認められる場合、補助事業実施期間中においても、交付決定を取り消す場合があります。
補助事業期間終了後も、会計検査院の検査や文化庁による執行状況調査の対象になるとともに、検査・調査の結果によっては、補助金を国庫に返納させる場合があります。
- 補助金の不正受給等を行った場合、加算金を付して補助金を返納するだけでなく、「芸術活動支援等事業において不正行為等を行った芸術団体等の応募制限について」(平成22年9月16日文化庁長官決定)を準用し、応募制限を行います。

8 採択後のスケジュール(イメージ)

本事業の採択後のスケジュールは下図の通りです。



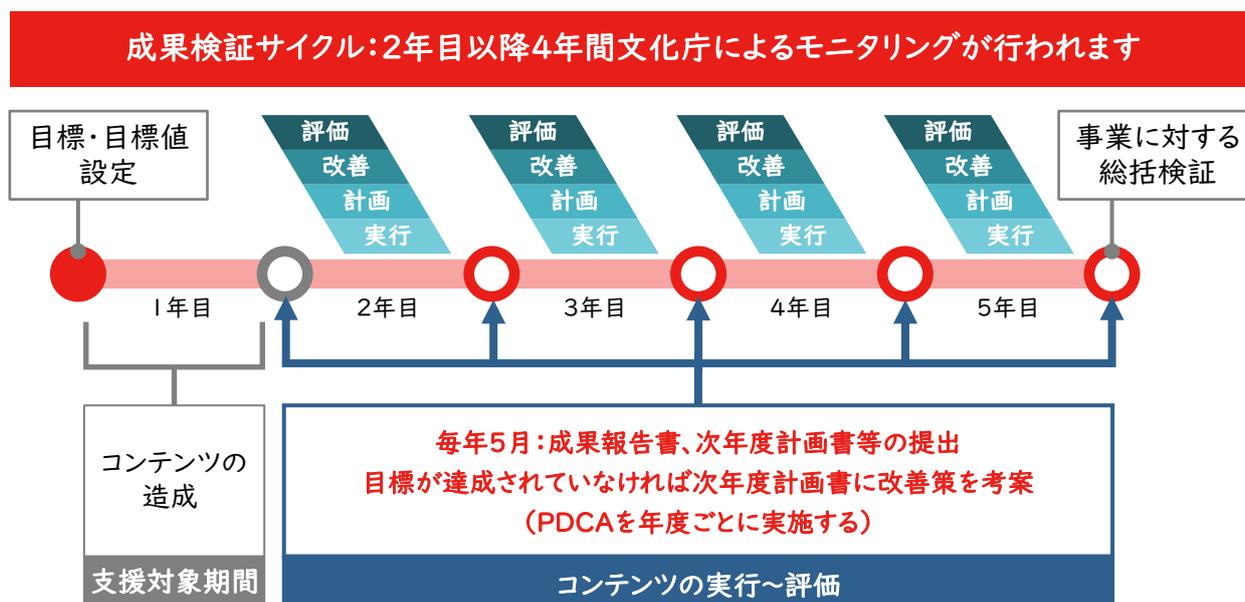
9 事業全体(5年間の)スケジュールと成果の報告

補助事業実施期間終了後も、**4年間は事業の取組状況と評価を報告**することとされています。
毎年翌5月までに「成果報告書」「次年度計画書」等の提出を求められます。

※採択事業者に別途連絡いたします。

提出いただいた成果報告書は、必要に応じて改善に必要な対応策等の助言を行います。

目標未達の場合には、原因を分析し、目標を達成するための改善策を提出するとともに、改善策を実行することとします。



IV 関係法令等

本補助事業に係る以下の法令等を記載していますので、応募に当たっては、事前に必ず熟読してください。

- 補助金等に係る予算の執行の適正化に関する法律
- 補助金等に係る予算の執行の適正化に関する法律施行令(抄)
- 文化芸術基本法(抄)
- 芸術活動支援等事業において不正行為等を行った芸術団体等の応募制限について
(平成22年9月16日文化庁長官決定)

○補助金等に係る予算の執行の適正化に関する法律(昭和30年8月27日法律第179号)

第一章 総則

(この法律の目的)

第一条 この法律は、補助金等の交付の申請、決定等に関する事項その他補助金等に係る予算の執行に関する基本的事項を規定することにより、補助金等の交付の不正な申請及び補助金等の不正な使用の防止その他補助金等に係る予算の執行並びに補助金等の交付の決定の適正化を図ることを目的とする。

(定義)

第二条 この法律において「補助金等」とは、国が国以外の者に対して交付する次に掲げるものをいう。

- 一 補助金
 - 二 負担金(国際条約に基く分担金を除く。)
 - 三 利子補給金
 - 四 その他相当の反対給付を受けない給付金であって政令で定めるもの
- 2 この法律において「補助事業等」とは、補助金等の交付の対象となる事務又は事業をいう。
- 3 この法律において「補助事業者等」とは、補助事業等を行う者をいう。
- 4 この法律において「間接補助金等」とは、次に掲げるものをいう。
- 一 国以外の者が相当の反対給付を受けないで交付する給付金で、補助金等を直接又は間接にその財源の全部又は一部とし、かつ、当該補助金等の交付の目的に従って交付するもの
 - 二 利子補給金又は利子の軽減を目的とする前号の給付金の交付を受ける者が、その交付の目的に従い、利子を軽減して融通する資金
- 5 この法律において「間接補助事業等」とは、前項第一号の給付金の交付又は同項第二号の資金の融通の対象となる事務又は事業をいう。
- 6 この法律において「間接補助事業者等」とは、間接補助事業等を行う者をいう。
- 7 この法律において「各省各庁」とは、財政法(昭和二十二年法律第三十四号)第二十一条に規定する各省各庁をいい、「各省各庁の長」とは、同法第二十条第二項に規定する各省各庁の長をいう。

(関係者の責務)

第三条 各省各庁の長は、その所掌の補助金等に係る予算の執行に当っては、補助金等が国民から徴収された税金その他の貴重な財源でまかなわれるものであることに特に留意し、補助金等が法令及び予算で定めるところに従って公正かつ効率的に使用されるように努めなければならない。

2 補助事業者等及び間接補助事業者等は、補助金等が国民から徴収された税金その他の貴重な財源でまかなわれるもので

あることに留意し、法令の定及び補助金等の交付の目的又は間接補助金等の交付若しくは融通の目的に従って誠実に補助事業等又は間接補助事業等を行うように努めなければならない。

(他の法令との関係)

第四条 補助金等に関しては、他の法律又はこれに基く命令若しくはこれを実施するための命令に特別の定のあるものを除くほか、この法律の定めるところによる。

第二章 補助金等の交付の申請及び決定

(補助金等の交付の申請)

第五条 補助金等の交付の申請(契約の申込を含む。以下同じ。)をしようとする者は、政令で定めるところにより、補助事業等の目的及び内容、補助事業等に要する経費その他必要な事項を記載した申請書に各省各庁の長が定める書類を添え、各省各庁の長に対しその定める時期までに提出しなければならない。

(補助金等の交付の決定)

第六条 各省各庁の長は、補助金等の交付の申請があつたときは、当該申請に係る書類等の審査及び必要に応じて行う現地調査等により、当該申請に係る補助金等の交付が法令及び予算で定めるところに違反しないかどうか、補助事業等の目的及び内容が適正であるかどうか、金額の算定に誤がないかどうか等を調査し、補助金等を交付すべきものと認めるときは、すみやかに補助金等の交付の決定(契約の承諾の決定を含む。以下同じ。)をしなければならない。

2 各省各庁の長は、補助金等の交付の申請が到達してから当該申請に係る補助金等の交付の決定をするまでに通常要すべき標準的な期間(法令により当該各省各庁の長と異なる機関が当該申請の提出先とされている場合は、併せて、当該申請が当該提出先とされている機関の事務所に到達してから当該各省各庁の長に到達するまでに通常要すべき標準的な期間)を定め、かつ、これを公表するよう努めなければならない。

3 各省各庁の長は、第一項の場合において、適正な交付を行うため必要があるときは、補助金等の交付の申請に係る事項につき修正を加えて補助金等の交付の決定をすることができる。

4 前項の規定により補助金等の交付の申請に係る事項につき修正を加えてその交付の決定をするに当たっては、その申請に係る当該補助事業等の遂行を不当に困難とさせないようにしなければならない。

(補助金等の交付の条件)

第七条 各省各庁の長は、補助金等の交付の決定をする場合において、法令及び予算で定める補助金等の交付の目的を達成するため必要があるときは、次に掲げる事項につき条件を附するものとする。

- 一 補助事業等に要する経費の配分の変更(各省各庁の長の定める軽微な変更を除く。)をする場合においては、各省各庁の長の承認を受けるべきこと。

二 補助事業等を行うため締結する契約に関する事項その他補助事業等に要する経費の使用方法に関する事項

三 補助事業等の内容の変更（各省各庁の長の定める軽微な変更を除く。）をする場合においては、各省各庁の長の承認を受けるべきこと。

四 補助事業等を中止し、又は廃止する場合においては、各省各庁の長の承認を受けるべきこと。

五 補助事業等が予定の期間内に完了しない場合又は補助事業等の遂行が困難となった場合においては、すみやかに各省各庁の長に報告してその指示を受けるべきこと。

2 各省各庁の長は、補助事業等の完了により当該補助事業者等に相当の収益が生ずると認められる場合においては、当該補助金等の交付の目的に反しない場合に限り、その交付した補助金等の全部又は一部に相当する金額を国に納付すべき旨の条件を附することができる。

3 前二項の規定は、これらの規定に定める条件のほか、各省各庁の長が法令及び予算で定める補助金等の交付の目的を達成するため必要な条件を附することを妨げるものではない。

4 補助金等の交付の決定に附する条件は、公正なものでなければならない、いやしくも補助金等の交付の目的を達成するため必要な限度をこえて不当に補助事業者等に対し干渉をするようなものであってはならない。

（決定の通知）

第八条 各省各庁の長は、補助金等の交付の決定をしたときは、すみやかにその決定の内容及びこれに条件を附した場合にはその条件を補助金等の交付の申請をした者に通知しなければならない。

（申請の取下げ）

第九条 補助金等の交付の申請をした者は、前条の規定による通知を受領した場合において、当該通知に係る補助金等の交付の決定の内容及びこれに附された条件に不服があるときは、各省各庁の長の定める期日までに、申請の取下げをすることができる。

2 前項の規定による申請の取下げがあつたときは、当該申請に係る補助金等の交付の決定は、なかつたものとみなす。

（事情変更による決定の取消等）

第十条 各省各庁の長は、補助金等の交付の決定をした場合において、その後の事情の変更により特別の必要が生じたときは、補助金等の交付の決定の全部若しくは一部を取り消し、又はその決定の内容及びこれに附した条件を変更することができる。ただし、補助事業等のうちすでに経過した期間に係る部分については、この限りでない。

2 各省各庁の長が前項の規定により補助金等の交付の決定を取り消すことができる場合は、天災地変その他補助金等の交付の決定後生じた事情の変更により補助事業等の全部又は一部を継続する必要がなくなった場合その他政令で定める特に必要な場合に限る。

3 各省各庁の長は、第一項の規定による補助金等の交付の決定の取消により特別に必要となった事務又は事業に対しては、政令で定めるところにより、補助金等を交付するものとする。

4 第八条の規定は、第一項の処分をした場合について準用する。

第三章 補助事業等の遂行等

（補助事業等及び間接補助事業等の遂行）

第十一条 補助事業者等は、法令の定並びに補助金等の交付の決定の内容及びこれに附した条件その他法令に基く各省各庁の長の処分に従い、善良な管理者の注意をもつて補助事業等を行わなければならない、いやしくも補助金等の他の用途への使用（利子補給金にあっては、その交付の目的となっている融資又は利子の軽減をしないことにより、補助金等の交付の目的に反してその交付を受けたことになることをいう。以下同じ。）をしてはならない。

2 間接補助事業者等は、法令の定及び間接補助金等の交付又は融通の目的に従い、善良な管理者の注意をもつて間接補助事業等を行わなければならない、いやしくも間接補助金等の他の用途への使用（利子の軽減を目的とする第二条第四項第一号の給付金にあっては、その交付の目的となっている融資又は利子の軽減をしないことにより間接補助金等の交付の目的に反してその交付を受けたことになることをいい、同項第二号の資金にあっては、その融通の目的に従って使用しないことにより不当に利子の軽減を受けたことになることをいう。以下同じ。）をしてはならない。

（状況報告）

第十二条 補助事業者等は、各省各庁の長の定めるところにより、補助事業等の遂行の状況に関し、各省各庁の長に報告しなければならない。

（補助事業等の遂行等の命令）

第十三条 各省各庁の長は、補助事業者等が提出する報告等により、その者の補助事業等が補助金等の交付の決定の内容及びこれに附した条件に従って遂行されていないと認めるときは、その者に対し、これらに従って当該補助事業等を遂行すべきことを命ずることができる。

2 各省各庁の長は、補助事業者等が前項の命令に違反したときは、その者に対し、当該補助事業等の遂行の一時停止を命ずることができる。

（実績報告）

第十四条 補助事業者等は、各省各庁の長の定めるところにより、補助事業等が完了したとき（補助事業等の廃止の承認を受けたときを含む。）は、補助事業等の成果を記載した補助事業等実績報告書に各省各庁の長の定める書類を添えて各省各庁の長に報告しなければならない。補助金等の交付の決定に係る国の会計年度が終了した場合も、また同様とする。

（補助金等の額の確定等）

第十五条 各省各庁の長は、補助事業等の完了又は廃止に係る補助事業等の成果の報告を受けた場合においては、報告書等の書類の審査及び必要に応じて行う現地調査等により、その報告に係る補助事業等の成果が補助金等の交付の決定の内容及びこれに附した条件に適合するものであるかどうかを調査し、適合すると認めるときは、交付すべき補助金等の額を確定し、当該補助事業者等に通知しなければならない。

（是正のための措置）

第十六条 各省各庁の長は、補助事業等の完了又は廃止に係る補助事業等の成果の報告を受けた場合において、その報告に係る補助事業等の成果が補助金等の交付の決定の内容及びこれに附した条件に適合しないと認めるときは、当該補助事業等につき、これに適合させるための措置をとるべきことを当該補助事業者等に対して命ずることができる。

2 第十四条の規定は、前項の規定による命令に従って行う補助事業等について準用する。

第四章 補助金等の返還等

（決定の取消）

第十七条 各省各庁の長は、補助事業者等が、補助金等の他の用途への使用をし、その他補助事業等に関して補助金等の交付の決定の内容及びこれに附した条件その他法令又はこれに基く各省各庁の長の処分に違反したときは、補助金等の交付の決定の全部又は一部を取り消すことができる。

2 各省各庁の長は、間接補助事業者等が、間接補助金等の他の用途への使用をし、その他間接補助事業等に関して法令に違反したときは、補助事業者等に対し、当該間接補助金等に係る補助金等の交付の決定の全部又は一部を取り消すことができる。

3 前二項の規定は、補助事業等について交付すべき補助金等の額の確定があつた後においても適用があるものとする。

4 第八条の規定は、第一項又は第二項の規定による取消をした場合について準用する。

(補助金等の返還)

第十八条 各省各庁の長は、補助金等の交付の決定を取り消した場合において、補助事業等の当該取消に係る部分に関し、すでに補助金等が交付されているときは、期限を定めて、その返還を命じなければならない。

2 各省各庁の長は、補助事業者等に交付すべき補助金等の額を確定した場合において、すでにその額をこえる補助金等が交付されているときは、期限を定めて、その返還を命じなければならない。

3 各省各庁の長は、第一項の返還の命令に係る補助金等の交付の決定の取消が前条第二項の規定によるものである場合において、やむを得ない事情があると認めるときは、政令で定めるところにより、返還の期限を延長し、又は返還の命令の全部若しくは一部を取り消すことができる。

(加算金及び延滞金)

第十九条 補助事業者等は、第十七条第一項の規定 又はこれに準ずる他の法律の規定による処分に関し、補助金等の返還を命ぜられたときは、政令で定めるところにより、その命令に係る補助金等の受領の日から納付の日までの日数に応じ、当該補助金等の額(その一部を納付した場合におけるその後の期間については、既納額を控除した額)につき年十・九五パーセントの割合で計算した加算金を国に納付しなければならない。

2 補助事業者等は、補助金等の返還を命ぜられ、これを納期日までに納付しなかつたときは、政令で定めるところにより、納期日の翌日から納付の日までの日数に応じ、その未納付額につき年十・九五パーセントの割合で計算した延滞金を国に納付しなければならない。

3 各省各庁の長は、前二項の場合において、やむを得ない事情があると認めるときは、政令で定めるところにより、加算金又は延滞金の全部又は一部を免除することができる。

(他の補助金等の一時停止等)

第二十条 各省各庁の長は、補助事業者等が補助金等の返還を命ぜられ、当該補助金等、加算金又は延滞金の全部又は一部を納付しない場合において、その者に対して、同種の事務又は事業について交付すべき補助金等があるときは、相当の限度においてその交付を一時停止し、又は当該補助金等と未納付額とを相殺することができる。

(徴収)

第二十一条 各省各庁の長が返還を命じた補助金等又はこれに係る加算金若しくは延滞金は、国税滞納処分の例により、徴収することができる。

2 前項の補助金等又は加算金若しくは延滞金の先取特権の順位は、国税及び地方税に次ぐものとする。

第五章 雑則

(理由の提示)

第二十一条の二 各省各庁の長は、補助金等の交付の決定の取消し、補助事業等の遂行若しくは一時停止の命令又は補助事業等の是正のための措置の命令をするときは、当該補助事業者等に対してその理由を示さなければならない。

(財産の処分の制限)

第二十二条 補助事業者等は、補助事業等により取得し、又は効用の増加した政令で定める財産を、各省各庁の長の承認を受けないで、補助金等の交付の目的に反して使用し、譲渡し、交換

し、貸し付け、又は担保に供してはならない。ただし、政令で定める場合は、この限りでない。

(立入検査等)

第二十三条 各省各庁の長は、補助金等に係る予算の執行の適正を期するため必要があるときは、補助事業者等若しくは間接補助事業者等に対して報告をさせ、又は当該職員にその事務所、事業場等に立ち入り、帳簿書類その他の物件を検査させ、若しくは関係者に質問させることができる。

2 前項の職員は、その身分を示す証票を携帯し、関係者の要求があるときは、これを提示しなければならない。

3 第一項の規定による権限は、犯罪捜査のために認められたものと解してはならない。

(不当干渉等の防止)

第二十四条 補助金等の交付に関する事務その他補助金等に係る予算の執行に関する事務に従事する国又は都道府県の職員は、当該事務を不当に遅延させ、又は補助金等の交付の目的を達成するため必要な限度をこえて不当に補助事業者等若しくは間接補助事業者等に対して干渉してはならない。

(行政手続法の適用除外)

第二十四条の二 補助金等の交付に関する各省各庁の長の処分については、行政手続法(平成五年法律第八十八号)第二章及び第三章の規定は、適用しない。

(不服の申出)

第二十五条 補助金等の交付の決定、補助金等の交付の決定の取消、補助金等の返還の命令その他補助金等の交付に関する各省各庁の長の処分に対して不服のある地方公共団体(港湾法(昭和二十五年法律第二百十八号)に基く港務局を含む。以下同じ。)は、政令で定めるところにより、各省各庁の長に対して不服を申し出ることができる。

2 各省各庁の長は、前項の規定による不服の申出があつたときは、不服を申し出た者に意見を述べる機会を与えた上、必要な措置をとり、その旨を不服を申し出た者に対して通知しなければならない。

3 前項の措置に不服のある者は、内閣に対して意見を申し出ることができる。

(事務の実施)

第二十六条 各省各庁の長は、政令で定めるところにより、補助金等の交付に関する事務の一部を各省各庁の機関に委任することができる。

2 国は、政令で定めるところにより、補助金等の交付に関する事務の一部を都道府県が行うこととすることができる。

3 前項の規定により都道府県が行うこととされる事務は、地方自治法(昭和二十二年法律第六十七号)第二条第九項第一号に規定する第一号法定受託事務とする。

(行政手続等における情報通信の技術の利用に関する法律の適用除外)

第二十六条の二 この法律又はこの法律に基づく命令の規定による手続については、行政手続等における情報通信の技術の利用に関する法律(平成十四年法律第五十一号)第三条及び第四条の規定は、適用しない。

(電磁的記録による作成)

第二十六条の三 この法律又はこの法律に基づく命令の規定により作成することとされている申請書等(申請書、書類その他文字、図形等人の知覚によって認識することができる情報が記載された紙その他の有体物をいう。次条において同じ。)については、

当該申請書等に記載すべき事項を記録した電磁的記録（電子的方式、磁気的方式その他人の知覚によっては認識することができない方式で作られる記録であって、電子計算機による情報処理の用に供されるものとして各省各庁の長が定めるものをいう。次条第一項において同じ。）の作成をもって、当該申請書等の作成に代えることができる。この場合において、当該電磁的記録は、当該申請書等とみなす。

（電磁的方法による提出）

第二十六条の四 この法律又はこの法律に基づく命令の規定による申請書等の提出については、当該申請書等が電磁的記録で作成されている場合には、電磁的方法（電子情報処理組織を使用する方法その他の情報通信の技術を利用する方法であって各省各庁の長が定めるものをいう。次項において同じ。）をもって行うことができる。

2 前項の規定により申請書等の提出が電磁的方法によって行われたときは、当該申請書等の提出を受けるべき者の使用に係る電子計算機に備えられたファイルへの記録がされた時に当該提出を受けるべき者に到達したものとみなす。

（適用除外）

第二十七条 他の法律又はこれに基く命令若しくはこれを実施するための命令に基き交付する補助金等に関しては、政令で定めるところにより、この法律の一部を適用しないことができる。

（政令への委任）

第二十八条 この法律に定めるもののほか、この法律の施行に関し必要な事項は、政令で定める。

第六章 罰則

第二十九条 偽りその他不正の手段により補助金等の交付を受け、又は間接補助金等の交付若しくは融通を受けた者は、五年以下の懲役若しくは百万円以下の罰金に処し、又はこれを併科する。

2 前項の場合において、情を知って交付又は融通をした者も、また同項と同様とする。

第三十条 第十一条の規定に違反して補助金等の他の用途への使用又は間接補助金等の他の用途への使用をした者は、三年以下の懲役若しくは五十万円以下の罰金に処し、又はこれを併科する。

第三十一条 次の各号の一に該当する者は、三万円以下の罰金に処する。

- 一 第十三条第二項の規定による命令に違反した者
- 二 法令に違反して補助事業等の成果の報告をしなかった者
- 三 第二十三条の規定による報告をせず、若しくは虚偽の報告をし、検査を拒み、妨げ、若しくは忌避し、又は質問に対して答弁せず、若しくは虚偽の答弁をした者

第三十二条 法人（法人でない団体で代表者又は管理人の定のあるものを含む。以下この項において同じ。）の代表者又は法人若しくは人の代理人、使用人その他の従業者が、その法人又は人の業務に関し、前三条の違反行為をしたときは、その行為者を罰するほか、当該法人又は人に対し各本条の罰金刑を科する。
2 前項の規定により法人でない団体を処罰する場合においては、その代表者又は管理人が訴訟行為につきその団体を代表するほか、法人を被告人とする場合の刑事訴訟に関する法律の規定を準用する。

第三十三条 前条の規定は、国又は地方公共団体には、適用しない。

2 国又は地方公共団体において第二十九条から第三十一条までの違反行為があつたときは、その行為をした各省各庁の長その他の職員又は地方公共団体の長その他の職員に対し、各本条の刑を科する。

附則抄

1 この法律は、公布の日から起算して三十日を経過した日から施行する。ただし、昭和二十九年度分以前の予算により支出された補助金等及びこれに係る間接補助金等に関しては、適用しない。

2 この法律の施行前に補助金等が交付され、又は補助金等の交付の意思が表示されている事務又は事業に関しては、政令でこの法律の特例を設けることができる。

○補助金等に係る予算の執行の適正化に関する法律施行令（昭和30年9月26日政令第255号）（抄）

（補助金等の交付の申請の手続）

第三条 法第五条の申請書には、次に掲げる事項を記載しなければならない。

- 一 申請者の氏名又は名称及び住所
- 二 補助事業等の目的及び内容
- 三 補助事業等の経費の配分、経費の使用法、補助事業等の完了の予定期日その他補助事業等の遂行に関する計画
- 四 交付を受けようとする補助金等の額及びその算出の基礎
- 五 その他各省各庁の長（略）が定める事項

2 前項の申請書には、次に掲げる事項を記載した書類を添附しなければならない。

- 一 申請者の営む主な事業
- 二 申請者の資産及び負債に関する事項
- 三 補助事業等の経費のうち補助金等によってまかなわれる部分以外の部分の負担者、負担額及び負担方法
- 四 補助事業等の効果
- 五 補助事業等に関して生ずる収入金に関する事項
- 六 その他各省各庁の長が定める事項

3 第一項の申請書若しくは前項の書類に記載すべき事項の一部又は同項の規定による添附書類は、各省各庁の長の定めるところにより、省略することができる。

（事業完了後においても従うべき条件）

第四条 各省各庁の長は、補助金等の交付の目的を達成するため必要がある場合には、その交付の条件として、補助事業等の完了後においても従うべき事項を定めるものとする。

2 略

（事情変更による決定の取消ができる場合）

第五条 法第十条第二項に規定する政令で定める特に必要な場合は、補助事業者等又は間接補助事業者等が補助事業等又は間接補助事業等を遂行するため必要な土地その他の手段を使用することができないこと、補助事業等又は間接補助事業等に要する経費のうち補助金等又は間接補助金等によってまかなわれる部分以外の部分を負担することができないことその他の理由により補助事業等又は間接補助事業等を遂行することができない場合（補助事業者等又は間接補助事業者等の責に帰すべき事情による場合を除く。）とする。

（決定の取消に伴う補助金等の交付）

第六条 法第十条第三項の規定による補助金等は、次に掲げる経費について交付するものとする。

一 補助事業等に係る機械、器具及び仮設物の撤去その他の残務処理に要する経費

二 補助事業等を行うため締結した契約の解除により必要となった賠償金の支払に要する経費

2 前項の補助金等の額の同項各号に掲げる経費の額に対する割合その他その交付については、法第十条第一項の規定による取消に係る補助事業等についての補助金等に準ずるものとする。

（補助事業等の遂行の一時停止）

第七条 各省各庁の長は、法第十三条第二項の規定により補助事業等の遂行の一時停止を命ずる場合においては、補助事業者等が当該補助金等の交付の決定の内容及びこれに附した条件に適合させるための措置を各省各庁の長の指定する期日までにとらなるときは、法第十七条第一項の規定により当該補助金等の交付の決定の全部又は一部を取り消す旨を、明らかにしなければならない。

(国の会計年度終了の場合における実績報告)

第八条 法第十四条後段の規定による補助事業等実績報告書には、翌年度以降の補助事業等の遂行に関する計画を附記しなければならない。ただし、その計画が当該補助金等の交付の決定の内容となった計画に比して変更がないときは、この限りでない。

(補助金等の返還の期限の延長等)

第九条 法第十八条第三項の規定による補助金等の返還の期限の延長又は返還の命令の全部若しくは一部の取消は、補助事業者等の申請により行うものとする。

2 補助事業者等は、前項の申請をしようとする場合には、申請の内容を記載した書面に、当該補助事業等に係る間接補助金等の交付又は融通の目的を達成するためとつた措置及び当該補助金等の返還を困難とする理由その他参考となるべき事項を記載した書類を添えて、これを各省各庁の長(略)に提出しなければならない。

3 各省各庁の長は、法第十八条第三項の規定により補助金等の返還の期限の延長又は返還の命令の全部若しくは一部の取消をしようとする場合には、財務大臣に協議しなければならない。

4~5 略

(加算金の計算)

第十条 補助金等が二回以上に分けて交付されている場合における法第十九条第一項の規定の適用については、返還を命ぜられた額に相当する補助金等は、最後の受領の日に受領したものとし、当該返還を命ぜられた額がその日に受領した額をこえるときは、当該返還を命ぜられた額に達するまで順次さかのぼりそれぞれの受領の日において受領したものとす。

2 法第十九条第一項の規定により加算金を納付しなければならない場合において、補助事業者等の納付した金額が返還を命ぜられた補助金等の額に達するまでは、その納付金額は、まず当該返還を命ぜられた補助金等の額に充てられたものとする。

(延滞金の計算)

第十一条 法第十九条第二項の規定により延滞金を納付しなければならない場合において、返還を命ぜられた補助金等の未納付額の一部が納付されたときは、当該納付の日の翌日以後の期間に係る延滞金の計算の基礎となるべき未納付額は、その納付金額を控除した額によるものとする。

(加算金又は延滞金の免除)

第十二条 第九条の規定は、法第十九条第三項の規定による加算金又は延滞金の全部又は一部の免除について準用する。この場合において、第九条第二項中「当該補助事業等に係る間接補助金等の交付又は融通の目的を達成するため」とあるのは、「当該補助金等の返還を遅延させないため」と読み替えるものとする。

(処分を制限する財産)

第十三条 法第二十二條に規定する政令で定める財産は、次に掲げるものとする。

- 一 不動産
- 二 船舶、航空機、浮標、浮さん橋及び浮ドック
- 三 前二号に掲げるものの従物
- 四 機械及び重要な器具で、各省各庁の長が定めるもの
- 五 その他各省各庁の長が補助金等の交付の目的を達成するため特に必要があると認めて定めるもの

(財産の処分の制限を適用しない場合)

第十四条 法第二十二條ただし書に規定する政令で定める場合は、次に掲げる場合とする。

一 補助事業者等が法第七条第二項の規定による条件に基づき補助金等の全部に相当する金額を国に納付した場合

二 補助金等の交付の目的及び当該財産の耐用年数を勘案して各省各庁の長が定める期間を経過した場合

2 第九条第三項から第五項までの規定は、前項第二号の期間を定める場合について準用する。

(不服の申出手続)

第十五条 法第二十五条第一項の規定により不服を申し出ようとする者は、当該不服の申出に係る処分の通知を受けた日(処分について通知がない場合においては、処分があつたことを知った日)から三十日以内に、当該処分の内容、処分を受けた年月日及び不服の理由を記載した不服申出書に参考となるべき書類を添えて、これを当該処分をした各省各庁の長(法第二十六条第一項の規定により当該処分を委任された機関があるときは当該機関とし、同条第二項の規定により当該処分を行うこととなった都道府県の知事又は教育委員会があるときは当該知事又は教育委員会とする。以下この条において同じ。)に提出しなければならない。

2 各省各庁の長は、通信、交通その他の状況により前項の期間内に不服を申し出なかつたことについてやむを得ない理由があると認める者については、当該期間を延長することができる。

3 各省各庁の長は、第一項の不服の申出があつた場合において、その申出の方式又は手続に不備があるときは、相当と認められる期間を指定して、その補正をさせることができる。

○文化芸術基本法(平成13年法律第148号)(抄)

(伝統芸能の継承及び発展)

第十条 国は、雅楽、能楽、文楽、歌舞伎、組踊その他の我が国古来の伝統的な芸能(以下「伝統芸能」という。)の継承及び発展を図るため、伝統芸能の公演、これらに用いられた物品の保存等への支援その他の必要な施策を講ずるものとする。

(生活文化の振興並びに国民娯楽及び出版物等の普及)

第十二条 国は、生活文化(茶道、華道、書道、食文化その他の生活に係る文化をいう。)の振興を図るとともに、国民娯楽(囲碁、将棋その他の国民的娯楽をいう。)並びに出版物及びレコード等の普及を図るため、これらに関する活動への支援その他の必要な施策を講ずるものとする。

(文化財等の保存及び活用)

第十三条 国は、有形及び無形の文化財並びにその保存技術(以下「文化財等」という。)の保存及び活用を図るため、文化財等に関し、修復、防災対策、公開等への支援その他の必要な施策を講ずるものとする。

(地域における文化芸術の振興等)

第十四条 国は、各地域における文化芸術の振興及びこれを通じた地域の振興を図るため、各地域における文化芸術の公演、展示、芸術祭等への支援、地域固有の伝統芸能及び民俗芸能(地域の人々によって行われる民俗的な芸能をいう。)に関する活動への支援その他の必要な施策を講ずるものとする。

○芸術活動支援等事業において不正行為等を行った芸術団体等の応募制限について(平成22年9月16日文化庁長官決定)

文化庁が芸術活動への支援等のために公募により行う事業について、芸術団体等による支援金等の不正受給等があつた場合、下記のとおり応募制限を行う。

記

(1) 虚偽の申請や報告による支援金等の不正な受給、支援金等の他の事業・用途への流用、私的流用：応募制限期間4～5年

(2) 調査に応じない、調査に必要な書類の提出に応じない、その他文化庁の調査を妨害したと認められる場合：応募制限期間2～3年

(3) 文化庁以外の他の機関が行う支援事業において不正行為等を行ったことが判明した場合は、上記(1)、(2)に準じて取り扱う。